

# Dispatch of the Nusan Mission : The Negotiations between Qing and Abla in 1757

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小沼, 孝博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24312">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24312</a>

# ヌサン使節の派遣

## —— 1757 年における清とアブライの直接交渉 ——

小沼 孝博

### はじめに

1755 年 (乾隆 20)、清 (1636-1912) は天山山脈以北の草原地帯に拠る遊牧国家ジュンガルを滅亡に追い込んだ。清はただちにジュンガル政権の下にあったオイラト遊牧民を、自身の支配下に編入すべく施策をこらすが (小沼 2003; 小沼 2004)、同年後半には、当初清の軍事行動に協力していたホイト部長のアムルサナが離叛し、同調者<sup>1</sup>を率いてカザフ中ジュズの実力者アブライ=スルタンのもとへ奔った。1756 年 (乾隆 21)、アムルサナ追撃のためにカザフ草原に進んだ清軍は、カザフをアムルサナとともに討伐すべき敵とみなし、アムルサナ・アブライの連合軍と衝突した。清軍との戦いで負傷したアブライは、アムルサナとの連合を解消し、翌 1757 年 (乾隆 22) に清へ「帰順」を求めるに至る。清はこれをカザフの「帰順」と理解し、両者のさらなる衝突は回避されることになった。

18 世紀中葉、中央アジアに進出した清は現地の様々な勢力と接触を持ち、関係を築いていく。アブライとの関係樹立はその最初のもので

あり、以後の清の中央アジア政策の展開を考える上で看過できない位置にある。筆者は旧稿において、1757 年後半にアブライが派遣したヘンジガル使節の受入、およびアブライが乾隆帝に宛てたオイラト語の「帰降表文」の受諾という、カザフの「帰順」に対する清朝中央での初期対応を検討した (小沼 2006; Onuma 2010a)。一方、それと同時並行で、ジュンガリアに展開する遠征軍を率いる定辺右副將軍ジョーフイ Jaohūi (兆恵) たちは、アブライとコンタクトをとるべく行動を開始していた。それが侍衛ヌサン Nusan (努三) と<sup>タージュ</sup>台吉エルケシャラ Erkešara (額爾克沙拉) の派遣 (以下、ヌサン使節<sup>2</sup>) によるアブライとの直接交渉である。

ヌサン使節の派遣は、1757 年 7 月末にヘンジガル使節がジョーフイの軍営に到着した際、ただちに計画された。詳細は後述するが、派遣の主な目的は、アムルサナの探索、およびカザフ遊牧集団の内部調査であった。ヌサン使節とアブライとの直接交渉は、清-カザフ間の本格的な交渉として最初にして最長のものであり、両者の関係構築において極めて重要な意義を有し、検討に値する。

そこで本稿では、ヌサン使節とアブライとの交渉の内容、および交渉に臨んだアブライの言動に注目しながら、使節派遣の全体像を明らかにしたい。主に依拠する史料は、アブライの宿営に滞在中のヌサンがジョーフイに送り、その後でジョーフイの奏摺の一部として清朝中央に送付された、二つの満洲語の報告文である。このうち一つは、使節の公的な活動報告というべきもので、軍営の出発から始まり、アブライとの交渉の様子が順を追って詳細に記され、かなりの長文である（以下、報告Ⅰ<sup>3</sup>）。もう一方は、さほど分量はないが、ジョーフイが「エルケシャラとヌサンが別途密かに送った書簡」(Ma. Erkešara nusan sei geli narhūšame jasiha bithe)と記すように、使者2人の私的な報告という性格を持ち、報告Ⅰにみえない情報や所感が含まれている（以下、報告Ⅱ<sup>4</sup>）。報告Ⅰが大幅に省略されながらも、後年に清朝政権が編纂した『平定準噶爾方略』（以下『準略』）に収録<sup>5</sup>されているのに対し、報告Ⅱがいかなる編纂史料にも未収録であることは、両報告の性格の違いを端的に示している。

また両報告には、アブライ個人や彼と関係を持つカザフ首長層、および当時のカザフ社会に関する興味深い情報が盛り込まれている。あくまで清の使者の視点を通じての記述であることに注意せねばならず、実際にそこには誤解や偏見が少なからずみられるが、カザフの地に進み、アブライに面会した人物の記録としては、比類なき情報量を持つ。両報告から窺えるカザフ人たちの姿や言動は、これまで主にロシア史料に依拠して描かれてきた、18世紀中葉のカザフ社会のイメージを相対化することにも寄与するであろう。

なお、引用史料中における〔 〕は筆者の補足、（ ）は筆者の註釈、……は中略を意味する。

## 1. ヌサン使節の派遣

### 1.1. 派遣の目的

ヌサン (?-1778) は、1750年代の清の西征事業に最初から携わっていた人物である。当初の参贊大臣の地位は隠匿の罪により革職されたが、継続して軍務に従事した。1757年に頭等侍衛の身分でカザフに遣使し、その任務遂行により乾隆帝の信頼を回復すると、1760年（乾隆25）到北京へ凱旋するまで西北戦線にあった<sup>6</sup>。將軍ジョーフイとは同じ満洲正黄旗出身で、2人はともに1750-60年代の乾隆帝南巡に同行している（Chang 2007: 121）。エルケシャラ (?-1766) は、1757年に定辺將軍の地位にあったハルハ=モンゴルの親王ツェンゲンジャブの長子であり、派遣当時是一等台吉であった<sup>7</sup>。彼が派遣された理由は、かつてエルケシャラがジュンガルのガルダンツェリンのもとに滞在していた時、そこで捕囚となったアブライと交友を結んだことによる。

エルケシャラは、ジュンガルに長くいた。カザフの性格をよく知っており、アブライとともに同じ場所で2-3年住み、とても仲がよかった<sup>8</sup>。

アブライと本格的な交渉に臨むにあたり、エルケシャラとアブライの個人的関係に期待するところがあったと考えられる。

使節派遣に先立ち、ジョーフイと彼らとの間で、派遣の目的と交渉における基本姿勢について協議がなされた。前述のように、派遣の主な目的は、アムルサナの探索とカザフ遊牧集団の

内情調査であった<sup>9</sup>。ジョーフィは、8月2日起草の上奏文で、具体的に次のような指示を与えていたことを報告している。

汝らが〔アブライのもとに〕到ったら、アブライが恭順をもって帰順したことを褒め称え、「ただアムルサナの捕捉に努めるように。まことにアムルサナを擒獲し、〔その身柄を〕大エジェン（清朝皇帝）に送致すれば、大エジェンは汝の誠意を聖鑑し、必ずや厚大なる恩恵を及ぼすであろう」と心尽くして語れ。諸オトグ<sup>10</sup>の頭目〔の人名や人数〕を調査する際、我々の問題を取り扱うかのように、詳しく明確に調べる必要はない。ただ彼らの性格にあわせ、自ら望んで「誥冊を受け取りたい」という者〔の名前〕を、大小を区別して〔名簿に〕記して持ってくれば、〔それで〕済むことだ<sup>11</sup>。

最重要の目的は、何よりもアムルサナの擒獲であり、その解決なくしては、カザフとの関係構築に関する交渉はありうべくもなかった。事実、アブライの宿営到着後、交渉の前半はアムルサナ問題に費やされることになる。一方、カザフの帰順にともなう内情調査に関しては、詳密さは不要とされた。このような姿勢の背景については後述することにした。

## 1.2. アブライの宿営までの道程

8月3日にジョーフィのアブライ宛書簡を携えて出発したヌサン使節は、一路カザフ草原東部を進み、9月5日にアブライのもとに到着する。この約1ヶ月の行程で遭遇した出来事のはとんどを『準略』は省略しているが、報告Iには詳しい記述がみられる。

8月15日、使節はアブラル（Ma. abural）の

地に到ると、ダウラト=バイ=バートル（Ma. Dolotbai batur）率いるカザフの兵30名と出会った。ダウラト=バイは60歳ほどの老頭目であり、ホジベルゲン（Ma. Hojibergen）、カラ=バートル（Ma. Kara batur）とともに兵300名を率いて展開していたが、清の使節到来の消息を得たため、別れて迎接に来たという<sup>12</sup>。また、アブライがアムルサナと遭遇し、アムルサナは取り逃がしたが、他のオイラトの首領を捕らえ、清の軍営に送致したことを使節に告げた。このダウラト=バイは、自身に関して、

我は〔カザフの〕東辺に住む各部衆を統轄する長。どの地方の使者が来ても、みな我々のもとより対処してアブライに会わせている<sup>13</sup>。

と述べており、アブライに属する東方担当の責任者であった。ダウラト=バイは、族弟ホトムベト=バートル（Ma. Hotombit batur）をヌサン使節の世話役、属下のジャンキシ（Ma. jangkisi<sup>14</sup>）を通訳兼道案内として使節に同行させ、また使節到来をアブライに告げるため息子ジャンドゥケル（Ma. Jandukel）を派遣した。ダウラト=バイ自身も、2日間使節に同行した後、8月17日に迎接準備のため自身の遊牧地に戻っていった（報告I: 1339-42）。

8月31日に「カザフの遊牧地の端」に位置するオルント（Ma. Ūluntu）に到着してから4日間、沿路で遊牧するカザフの部衆が参集し、何度か使節歓迎の酒宴が開かれた。その間、9月1日にジャンドゥケルが、アブライの近習であるアクジュル（Ma. Akjul）とともに戻り、アブライがシュレタイ（Ma. Šuletai）の地に出向いて使節の到来を待つことが告げられた。ヌサ

ンは護衛のソロン兵マイラトゥ (Ma. Mailatu) を派出して、アクジュルとともに先発させた。翌2日にマイラトゥは帰還し、アブライが9月5日の面会を約束したことを報告した (報告 I: 1342-44)。

アブライのもとへ急ぐ使節一行であったが、9月3日にダウラト=バイの遊牧地に到ると、再び酒宴が開かれた。歓迎ムード一色のものであったが、酒宴の最中に語られた、カザフ人の間で囁かれていた噂は注目される。それは、最近満洲兵100名が到来してカザフの部衆と羊群を蹴散らし、さらに1万もの兵が続いてやって来るというものであった。おそらくカザフ人には、ヌサン使節の来訪が上述の噂と重なり合い、清軍の大規模な軍事行動の前触れに思われたのであろう。不安をのぞかせるカザフの頭目たちに対して、ヌサンは、清軍の軍事行動はあくまでアムルサナを捕らえるためであり、カザフに危害を加えることはないと説明した (報告 I: 1345-46)。しかし、カザフの清に対する不信感 は根強く、報告 II によれば、アブライの宿営でも使節は歓待されたが、その裏では、

満洲兵が四オイラトを根絶した。我々をどうして安逸ならしめようか。羊がどうして狼とともにいられようか<sup>15</sup>。

という声が聞かれた。これは、アブライの清との講和について、中ジュズの諸首長の多くが反対していたというロシア側の情報と合致する (Gurevich 1979: 135-136)。前年より続く清軍の攻勢により、カザフ社会では清 (満洲) に対する恐怖と警戒が広がっており、ヌサンもそれを肌で感じ取ったのである。

9月5日、ヌサン使節はアブライとの対面に

及ぶが、その直前にソロンの委領催<sup>16</sup> オイボー (Ma. Oiboo) が到来し、ジョーフィからの新たな書簡が手渡された。後述するように、オイボーがもたらした書簡には、アブライとの交渉において、切り札となる内容を含んでいた。

ヌサンとエルケシャラはアブライの帳房<sup>オルト</sup>に通され、ついに面会を果たす。まずアブライが乾隆帝の安寧と、そして將軍や大臣の健康を尋ね、次に使節側から、軍営出発時に託されたジョーフィの書簡と繻子がアブライに手渡された。アブライは、おそらくオイラト語で書かれていたであろう書簡を近習に読み上げさせると、具体的な交渉は内容を吟味した上で翌日以降におこないたいと返答し、長旅の労をねぎらう酒宴を開き、馬肉が供された (報告 I: 1346-1347)。ヌサンは、アブライについて

アブライは40歳ほどで、体は小さく、頬髭があり、人格は聡明で、筋道を立てて語る<sup>17</sup>。

と、その風采と性格を描写している。

## 2. アムルサナ問題

### 2.1. アムルサナをめぐる交渉

アムルサナをめぐる駆け引きは酒宴の席から始まった。アブライは、数日前にアムルサナを取り逃がした時の様子を次のように語った。アムルサナの息子デルメシャル (Ma. Dermešal) を捕らえたアブライは、彼の情報を頼りに搜索を続け、8月3日の日暮れにアルチャト=チョホ (Ma. Arcatu coho) の地でアムルサナら一行30人と遭遇した。アブライは難しい夜襲を避け、翌朝に行動を起こすことを決め、情報の漏洩を避けるためデルメシャルを殺した。しかし、

夜間に宿営を取り囲んだ時に気付かれ、10人ほどを捕らえたが、アムルサナを含む残りの逃亡を許してしまった（報告I: 1349-50）。これについてアブライは、特に悪びれた様子もなく、ヌサンに向かって、

大エジェンの轅<sup>ながえ</sup>はあまた。〔アムルサナの搜索は〕例えれば、失った馬を求めるようなものだ。人が多ければ捕捉できよう。大エジェンの轅は長い。どこに行けども、必ず捕らえることができるのではないか<sup>18</sup>。

と述べ、カザフによるアムルサナの捕捉が困難であることを暗に示唆した。

実は、以上のアムルサナを取り逃がした顛末は、すでに8月11日にジョーフイに伝わっていた。8月3日にカザフに擒獲され、清の軍営に送致されたオイラトの首領の中に、アムルサナの側近たるダシツェリンとチバガンがいた。2人の供述によれば、アブライはアムルサナを捕捉できたが、故意に取り逃がした可能性があった。アブライはアムルサナと天に向かって誓いを立てており、それへの違背を怖れるがため、アブライは敢えてアムルサナを捕らえなかったという。ジョーフイは、アブライを恨むこの2人の供述はにわかに信じ難いとしながらも、その内容をヌサンに伝えるためオイボーを派遣したのである<sup>19</sup>。

上記のアブライの釈明を聞いたヌサンは、こぞとばかりにオイボーを呼び入れ、オイボーにダシツェリンらから得た供述内容を語らせた。これを聞いたアブライは、「これは特に我を欺き不和ならしめる言葉だ!」（報告I: 1352）と気色ばみ、現在でも搜索に努力していると弁明した。対するヌサンは、たたみかけるように、

アムルサナの捕捉が遅れれば、清軍がカザフ草原に入って直接探索せざるを得ない。清軍がカザフの牧民を襲撃することはないが、大軍を目にした人々は混乱し、憂苦を被ることになるかもしれない、と圧力をかけた。これを聞いたアブライは、うなだれながら、「明日は一日休息し、明後日に会って話し合いたい」と返答したという（報告I: 1351-53）。

その9月7日の交渉の席で、さらにヌサンはアブライに迫った。爵位の授与に関する協議を望むアブライに対し、あくまで清の使節はアムルサナの問題に固執し、アムルサナの居場所を問い質し、迅速なる捕捉を要求した。これに対してアブライは、アムルサナはカザフの地にいないと繰り返すのみであった（報告I: 1353-55）。

そのアムルサナは、1757年8月8日（露暦1757/7/28）にロシアのセミパラチンスクに到着していた。おそらく、8月3日にアルチャト=チョホより逃亡した後、そのままセミパラチンスクへ向かったのであろう。ロシアに保護されたアムルサナは、8月31日（露暦8/20）にトボリスクに到るが、その途上で天然痘を発病しており、10月2日（露暦9/21）に同地で死去する（森川1983: 85-86）。アブライがどの程度認識していたかは不明だが、ヌサン使節が到来した時点で、アムルサナがカザフの地を離れていたのは事実であった。

さて翌9月8日、心労のせいか、アブライは病に伏せてしまい、その後14日間も協議は再開されなかった。この協議中断はヌサン使節に、アブライとアムルサナとの関係に関する情報収集の機会を与えた。贈品を手渡ししながら探りを入れていくと、あるカザフ人から、やはりアブライ、ホジベルゲン、ダウラト=バイら首領は

アムルサナと盟約を結んでおり、それを天に誓ったため、アブライは背約すれば命を落とすと信じている、という情報が提供された。ここでヌサンは、カザフの間における盟約の重さを認識したという。さらに、当事者の一人であったダウラト＝バイが他の諸頭目とともに来訪した際、ヌサンはカザフがアムルサナを捕らえることでどれだけ清から利益を得ることができるかを力説し、説得を試みた。するとダウラト＝バイは、ヌサンに対して次のように告白した。

わたしはアムルサナとともに、仏を頭に戴き、烏鎗（銃）を口に含んで誓いを立てていた。〔しかし〕アムルサナは、わたしに対して7度誓いを破った。いまではわたしは彼を捕らえ、大エジェンの恩賞を得たいので、天に向かって祈祷し請願する。天よ、我に恩を及ぼし、アムルサナを我が手中に収めさせんことを！<sup>20</sup>

このダウラト＝バイの宣誓に続き、そこに居合わせた他の頭目たちは、口々に「我々はアムルサナと誓いを立てたことはない」と述べ、アムルサナ擒獲への協力を約束したという。ヌサンはこれら頭目たちと衆議し、アムルサナの捕捉がかなわなければ、清の使節は絶対帰還しないことを触れ回らせ、アブライに圧力をかけようとした（報告Ⅰ：1355-60）。

以上からは、ヌサン使節の説得により、ダウラト＝バイたちの協力を取り付けたかにみえる。ただし、ダウラト＝バイは、アムルサナの潜伏については、これをきっぱりと否定している（報告Ⅰ：1358）。また、アブライの所領内に住むオイラト人の間では、アムルサナがホジベルゲンのもとに匿われているという噂も流れ

ていた。ヌサンは自らホジベルゲンのもとに赴いて探索することを求めたが、アブライとダウラト＝バイは「アムルサナはそこにいない」と断言し、許可しなかった（報告Ⅱ：1553）。

9月21日、様々な思惑が錯綜する中、回復したアブライとの交渉が再開した。アブライに久々に会したヌサンは、情報収集の成果をふまえ、アムルサナの問題をこれまでになく厳しく問いつめた。するとアブライは、意外にも、かつてアムルサナと盟約を結んだことをあっさりと認めた。ただし、カザフの地にアムルサナはいないとあらためて主張し、それが偽りなきことを自分の子弟を殺して保証すると申し出、さらにこれが偽りであれば清軍の攻撃により全カザフは破滅すべし、という呪詛の言葉を唱えた（報告Ⅰ：1360-65）。

これまでにない熱のこもった主張に、ヌサンはアブライの言葉を認めざるを得なくなった。結局はアムルサナ擒獲への努力を求めつつも、子弟の命を懸けての保証は適当でないとたしなめ、ヌサンはアブライによる宣誓を受諾しなかった。アブライはヌサンたちから信頼を得たことを大いに喜んだという（報告Ⅰ：1365-66）。これ以降、両者の協議内容は、アムルサナ問題から、清とカザフの関係構築へと移っていく。

## 2.2. アブライの態度の変化

アムルサナの問題をめぐるヌサン使節とアブライとの交渉は、ヌサンらがカザフの首領の切り崩し工作に一定の手応えを得ていたにもかかわらず、結局はアブライがそれをうまくかわした結果となった。ヌサンらは、ダウラト＝バイとのやり取りの中で、いかにカザフ人が宣誓行為を重視するかを強く認識したというが、その

後のアブライとの交渉では、むしろその認識を見透かされ、アブライに一芝居打たれた感すらある。

ただし、アブライがヌサンら使節の圧力に屈することなく、自分の主張を押し通すことができたのには、他にも何らかの理由があったと考えられる。特に病前の首をうなだれるような様子と、回復後にあっさりとアムルサナとの盟約を認め、強気の発言でヌサンらを納得させた態度との間には、明らかにアブライの心理的变化がみてとれる。ヌサンもこのアブライの変化には気付いていた。

〔アブライは〕我々と会った時、最初の2日は真意をまったく語りませんでした。みたところ、我々の言動を観察していたようです。台吉エルケシャラに対して以前〔ともに〕暮らしたことを懐かしんで話していたのをみますに、親しくしているようです。アブライが病氣し、ややよくなった後、毎日会って協議するようになると、アブライの態度は我々に対して非常によくなり、全てのことを我々に相談して処理するようになりました<sup>21</sup>。

このようなアブライの変化には、実際のアムルサナの行動が関連していると考ええる。前述のように、アムルサナは8月8日にセミパラチンスクに到着してロシアに保護され、天然痘を発病するも、その身柄は8月31日にトボリスクに送られた。アブライが病床にあったのは9月8日～21日であるが、おそらくこの間にアムルサナがロシアに入ったという確信的な情報を得たのではないだろうか。さらに、交渉の重点が清とカザフの関係に移ってしばらく経過し、使

節の帰還がみえてきた時点で、今度はアブライの方から使節に対し、アムルサナがロシア領内に入ったという情報を提供し、確認のためアンタガイ部のフラヒ=バートル (Ma. Hūlahi batur) をロシアに派遣することを申し出ている (報告 I: 1380-81)。アブライの態度変化の要因として、アムルサナのロシア逃亡という確信があったのは間違いないであろう。またアブライは使節に次のようにも語っている。

我々カザフは大国 (清<sup>22</sup>) と比べれば小さく、小さい〔国〕と比べればやや大きい。もしもアムルサナがいまロシアに入ったということが本当ならば、アムルサナを捕らえるは大エジェンにゆだねざるをえない。我々はロシアと睦まじく、交易もしている。我々の力ではアムルサナを捕らえることはできぬ。例えるに、磁器のうつわを手にとって石に投げつけるようなものだ<sup>23</sup>。

アムルサナの大国ロシアへの逃亡は、その問題がアブライあるいはカザフの手には負えぬ次元に到ったこと、すなわち自らが憂慮すべき問題でなくなったことを意味した。上記の発言に対してヌサンも、アムルサナが「本当にロシアに入ったなら、我々は別に対処する」 (報告 I: 1381) と返答しており<sup>24</sup>、実際にこの案件はアムルサナの遺体引き渡し問題として露清交渉に場を移していく (森川 1983: 86-98)。一方、後顧の憂いを除いたアブライは、友好的かつ積極的な姿勢へと転じ、清との関係構築にむけた協議が始まるのである。

ところで、上記の発言の中でアブライは、清の使節に「我々はロシアと睦まじく、交易もしている」とのみ説明し、自身を含む三ジュズの



支配者のロシアへの「臣従」には言及していない<sup>25</sup>。1757年から60年にかけて、露清間でカザフの地位をめぐる対立が生じるが、そこで清はカザフが自発的に帰順したととらえ、かたやロシアはカザフが長年ロシアの臣籍下にあることを主張した<sup>26</sup>。その狭間でカザフ（特にアブライら東部の支配者）は、清との交渉ではロシアとの関係に触れず、ただ清への恭順を示し続け、ロシアには清と接触は「講和」であり、「帰属」を意味しないことを説明し、双方との関係を維持した（野田 2005: 33-34; 野田 2011: 109-115）。上記のアブライの説明も、かかる文脈において理解できる。

また、以上のような18世紀後半におけるカザフの立場を、露清両国への「兩属」や「二重朝貢」とみる見解があったが、野田はカザフの主體的な戦略を認めて、カザフの「二方面外交」という枠組みを提示している（野田 2005: 40-42）。この枠組みを踏まえた場合、フラヒ=バートルのロシア派遣についても、新たな位置づけが可能である。このフラヒ=バートルは、ロシア史料に登場するクリャカ=バートル Kuliakabatyry に比定できる。彼の遊牧地はロシアに近いカザフ草原北部のイシム河流域にあり（KRO: 614; MOTsA 2: 163）、同地域に住むクルサラ=バートル Kulsara batyry とともに、しばしばアブライの要請を受けてトロイツキやオレンブルグに出向き、ロシア当局との交渉にあたった。アブライによれば、クリャカ=バートルはロシアより「ダルガン」(Ma. dargan)の称号<sup>27</sup>を得ていたが（報告 I: 1380）、これはタルハン制と呼ばれ、バシキール人やカザフ人の族長に「タルハン」(Ru. tarkhan)の地位を与え、ロシア皇帝に忠実な人物を育てようとするもの

だった（スルタンガリエヴァ 2008: 65）。ダウラト=バイやホジベルゲンがアブライの東方関係（ジューンガル、清）の窓口だったとすれば、クリャカやクルサラは対ロシア交渉の担当者といえ、野田が主張するカザフの「二方面外交」の担い手として注目すべき存在であろう。

### 3. アブライに対する帰順工作

#### 3.1. 清の基本姿勢

まず、アブライの「帰順」にともなう、清側の基本姿勢を確認しておこう。將軍ジョーフィはヌサンとエルケシャラに対して、アムルサナ問題の解決が先決としながらも、カザフの集団構成の把握や、彼らへの爵位授与の可能性を探るよう指示していた。この指示内容については、1757年8月30日の「帰降表文」の複写の到着と同時に、清朝中央へももたらされた。同日中に乾隆帝は次のような反応を示した。

彼ら（カザフ）の地は非常に遠い。よって彼らに爵銜を与えることを、まだ処理する必要はない。ジョーフィとフデらはすでに人を遣わしてアブライのもとに送り、彼らに爵銜を与えるべく通曉させているが、彼らの意向に任せるように。決してせかすな。もしも彼らが自ら望んで「誥冊を手に入れたい」といえば、それでよい。彼らが望まなければ、もはやくどくどいいうな。彼らの希望をみてなせば済むことである<sup>28</sup>。

乾隆帝は、清側からカザフに爵位の授与を積極的には働きかけず、あくまでカザフの任意とするべきと考えていた。翌8月31日に国内向けにカザフの帰順を宣布した漢文の明発上諭の中で、カザフに郡県制や旗制を導入しないと明言

した部分<sup>29</sup>にも、この意向は反映している。また同日、乾隆帝はアブライに対する最初の勅書を満文で出しているが、その中で次のように述べている。

我々の將軍たちのところから、「汝らがダエジェンに従った後で、汝らを必ず汗<sup>30</sup>や王の称号を賞与し封じる。汝らの遊牧集団の数を調べて〔名簿を〕呈送するように」と命じたことは、特に將軍や大臣らが辦事の者〔であるがゆえ〕である。すべもなく内地の例規に固執して処理することは、汝ら縁辺にいる人々にはあわない。汝ら遠い境界にいる人々を、内ジャサク、ハルハ、オイラトなどの人々と比べることはできない。汝らをして部落の人々を調査させれば、路が遠いので汝らは往来にゆえなく苦勞を蒙る。無益なることかくの如しであるゆえ、汝らは自らの旧俗にしたがうように。いまでもアブライはすでにハンであろうぞ。我が恩を及ぼして封ずるといへど、〔それは〕また汗に封ずるのみである。これより高い爵はない。ただし、このハンとは汝らが勝手に称揚したものであり、決して我が封じた爵位ではない。汝の心中で、もしも我が恩を及ぼし封ずれば、ますます名望が拳がらと思うならば、我はただちに恩を及ぼし、汝に称号を賞与し、汗の諸冊を与えれば、それまでである。汝らの属は、〔旧俗を変えず〕従来どおりにしておればよい。汝らから貢賦を徴集することはない、また汝らから供出させる物品もない<sup>31</sup>。

乾隆帝は、ジョーフィらが使節に指示した爵位の授与と集団構成の把握は、清朝中央の本意で

はないと弁明している。すなわち、同じ遊牧民とはいえ、カザフを内外モンゴルやオイラトの諸集団と同じと考え、国内基準（具体的には旗制の導入）にしたがって「帰順」を処理することはないはできない。爵位の授与についても、ハンを自称<sup>32</sup>するアブライへの汗爵授与は、その追認という意味でしかない。旧俗の維持とは実効支配を及ぼす意志のないことの表れであり、清朝政権のカザフに対する基本姿勢を説明であった<sup>33</sup>。

ところで、この上諭で乾隆帝は、ジョーフィやフデが「内地の例規に固執して処理」としていると批判し、対応のまずさを案じている。しかし、実際にジョーフィらが使節に与えた指示には、カザフに対する実効支配を模索するような積極的姿勢はみえず、むしろ清朝中央の意向と一致している。たしかに8月2日起草の上奏文の文面には曖昧さも残るが、乾隆帝の方が穿った見方をしているといえよう。ところが、よほど乾隆帝は憂慮していたのか、アブライ宛の勅書の発送後、あらためて9月10日にジョーフィとフデに以下のように命じた。

我の心中でやや不満であるのは、彼ら（ジョーフィとフデ）がヌサンらの派遣において〔指示した〕、カザフのアブライの属衆の数を調べる、官爵を賞与するという項目を、我は余計だと思案している。どうしてかという、我々がこの言葉を彼らに述べたら、彼ら〔カザフ〕は怖れ、かつ逆賊アムルサナもこの言葉をとらえて勝手にうまく語り、彼らカザフの人々を欺くやもしれぬと思うのだ。これらのことはみな必要ないと追って勅書を下して送ったけれど

も、ジョーフィとフデはこの論旨を受け取った後、なお急いで人を追加派遣し、カザフのアブライに送れ<sup>34</sup>。

さらに乾隆帝は、この文面に続けて8月31日のアブライ宛勅書の概要を繰り返し、勅書現物の到着を待たずに、使者を急派してアブライに口頭で説明させるよう命じている<sup>35</sup>。指示を受けたジョーフィらは、それにしたがいつつも、乾隆帝の誤解を解くため、ヌサン使節に与えた指示内容を、より明確な表現で説明しなおした。

汝たちが〔アブライのもとに〕到った後、何より特に重要なことはアムルサナを探して捕らえることである。ただし、アブライがすぐさまアムルサナを捕らえて急いで送ってくれば、別件をいろいろと処理できるが、処理しなくともよからう。もしも彼らが誥冊を求めれば、彼らに書簡を記させて自ら来させるか、あるいは〔彼らの〕子弟を派遣させて、奏請させるように。彼らが望まなければ、決して急ぐな。またアブライのような頭目や、オトグの人々について調べる際、我々〔が自身〕の問題を取り扱うのと同様に、戸数を記し、心尽くして詳細に調べる必要は決してない。それどころか、ジューンガルのオトグを取り扱う如く調べる必要もない。ただアブライに対して、誰がどのオトグの頭目であるのか、いかほどの戸数の人々を統轄しているのかを尋ね、我々が〔それを〕知れば十分である<sup>36</sup>。

この結果、清朝中央と將軍たちの間では、カザフに対する初動対応について意志の共有がはかられたといえる。なお、ヘンジガル使節の帰還

時に、乾隆帝は二つ目のアブライ宛の勅書を出しているが、そこでも清側には実効支配への意向がないことを強調している<sup>37</sup>。

以上、カザフとの関係構築に向けて清朝内部でなされた議論を確認したが、ここで考えておきたいのは、なぜ清朝政権が、カザフ社会には積極的に関与しないという方針をわざわざアブライに認知させようとしたのか、という点である。その理由は、上述の議論の中で必ずしも明示的ではない。ただし、このアブライとの接触と交渉はオイラト掃討作戦（1757-58）の最中になされており、かつ上諭や奏摺にみえる「内地の例規に固執して処理することは、汝ら縁辺にいる人々にはあわない」、「内ジャサク、ハルハ、オイラトなどの人々と比べることはできない」、「ジューンガルのオトグを取り扱う如く調べる必要もない」という文言に注目すれば、清の政策決定者の意識に、旗制導入を目指したジューンガル善後策に失敗し、現に反乱を招いているという反省の意識を看取できよう。オイラトにおいて成功をみなかった方策を、さらに遠方に位置するカザフに適用することが非現実的であることは清側も当初から理解しており、カザフの集団構成を厳密に調査する必要はないと考えていた。しかし、そのような調査や爵位の授与は、清の意図がいかあろうとも、カザフ側に権力の介入と理解され、「彼ら〔カザフ〕は恐れ、かつ逆賊アムルサナもこの言葉をとらえて勝手にうまく語り、彼らカザフの人々を欺き、オイラト支配と同じ轍を踏む可能性があった。さらなる混乱惹起を避けるため、清は慎重な姿勢をとるだけでなく、政策意図をアブライにも十分に理解させた上で、カザフとの関係構築を進めることにしたのである。

### 3.2. カザフの集団構成と頭目

ただし、以上のような議論はヌサン使節の派遣後に清朝内部でなされたものであった。事前にヌサンらはジョーフィから指示を受けていたが、より慎重な対応を確認する乾隆帝の新たな指示が届き、アブライに政策意図の説明がなされる前に、すでに関係構築に係わる交渉はスタートしていた。

9月21日のアブライの健康回復を境に、協議内容がアムルサナ問題から清とカザフの関係に移っていくと、今度はアブライが交渉をリードするようになる。まず争点となったのは、カザフの頭目と集団構成の把握であった。すでにアブライは、アムルサナ探索のためロシア辺境のケンゲル＝トゥラ（ウスチ＝カメノゴロスク要塞）へ赴く途上にあったシュンデネと7月28日に対面した際<sup>38</sup>、頭目20人の名を記して手渡していた（報告Ⅰ：1374）。しかし、アブライは協議に先立ち、カザフの集団構成について次のように説明した。

我々カザフは野生のロバのようにバラバラに遊牧しており、馬畜を養って生きている。我々三部の中ジュズ、大ジュズ、小ジュズはみな一体である。大ジュズはタシケントの地にいる。小ジュズはシル河末端のジャイ河の地にいる。みな一つの身体で、戦うとなれば共になし、従うとなればまた共になす。私の言葉に偽りはない。我が意では、大ジュズと小ジュズのハンやスルタンたちの名を、みな中ジュズの我々の名と共に記して与えたいと思っており……。もしもそれらの頭目の名を記さなければ、彼らは恨み、また離心するであろう。いかに処理すべき

かをアンバン殿らとともに協議したい<sup>39</sup>。

アブライによれば、三つのジュズに分かれているとはいえ、カザフは一心同体であり、共同歩調をとっていた。この言葉はすでに統一を失っていたカザフ社会の実情と相容れないが、アブライの意図は、交渉における自らの言動がカザフ全体を代表することを、清の使節に印象づけることにあったと考えられる（野田2011：128-129）。これに対してヌサンは、アブライの意図を見透かしてか、大ジュズと小ジュズの支配者の名はまだ乾隆帝に伝わっておらず、使者も派遣されてきていないので、にわかに聞き入れることはできない。この機会に清の使者が両ジュズに赴いてもよいが、將軍たちからカザフの頭目をすべて把握するよう指示は受けておらず、現段階で部族構成や人口規模の調査は実施しないと返答した（報告Ⅰ：1369-71）。

アブライは、遠方にある大・小ジュズに到るには「1年近く必要」と述べ、清の使者派遣を牽制するとともに、「各オトグの頭目を調べなければ、彼らは心服しない」と述べ再考を促した。ヌサンは、中ジュズは各部族の頭目まで、大・小ジュズではハンのみの名を提出させる折衷案を示したが、これにアブライは、中ジュズだけで百戸～千戸規模の集団を統轄する頭目は500人にのぼると述べ、その全員の名の提出を希望した。議論は3日間平行線をたどる。ヌサンは中ジュズの頭目数を十数人に限るという条件を強く主張したが、アブライは難儀し判断を下せなかった（報告Ⅰ：1371-73）。ヌサンらには、アブライの属下に500人もの頭目は存在しないという認識があった（報告Ⅱ：1556）。のちにこの事情を耳にしたシュンデネは、属下の頭目

が大勢であることをみせつけ、少しでも清朝皇帝から「恩恵」を引き出そうとするアブライの狙いを看破している<sup>40</sup>。

一方のアブライは、ヌサンら使節がいかほどの権限を持ち、その判断に信用が置けるか否か、はかりかねていたようである。交渉が行き詰まる中、アブライは次のように問いただした。

いまアンバン殿たちが我々の名を求めることは、將軍の言葉なのか、それともエジェンの勅諭なのか。我々の心中、どうも判然としていない<sup>41</sup>。

これに対してヌサンは、清の慣例として、上奏を経た將軍の言動は皇帝の意と違わず、ゆえにこの使節の派遣とその目的は皇帝の意にもとづくと述べた。この返答にアブライは納得したようで、ついに協議は妥協に至る。アブライはヌサンの面前で、中ジュズはハンとスルタン 19 人、主要な頭目（バートル、ビー<sup>42</sup>）44 人、大ジュズはハンとスルタン 2 人、バートル 5 人、小ジュズはハンとスルタン 3 人の名を書き出した<sup>43</sup>。さらにヌサンの指示に従ってそれら頭目を三等級に分け、提出する名冊を完成させた（報告 I: 1373-76）。

この名冊は、報告 I・II とともに軍営に送付され、ロシアから帰還したシュンデネが内容を確認した。シュンデネは中ジュズの構成について独自の調査をおこなっており、それによれば、主たるオトグが 36 で、総戸数は約 68,000 であったが、名冊中の中ジュズの頭目は、シュンデネの把握する人数より 13 人多かったという。このためシュンデネは、名冊の中ジュズ部分の記載と自身の調査結果をふまえ、中ジュズの集団構成に関する満洲語の名冊を作成し、それを清

朝中央に送付した<sup>44</sup>。アブライ作成の名冊原本の現存は確認できないが、シュンデネ作成の満洲語の名冊<sup>45</sup>は残されている。それによれば、中ジュズには、タラクト（Ma. Taraktu < Taraqty）、アルゲン（Ma. Argan < Argyn）、ナイマン（Ma. Naiman < Nayman）、ケレイ（Ma. Kere < Kerey）、ウワク（Ma. Wak < Waq）、テレングト（Ma. Tulunggu < Telenggut<sup>46</sup>）、キプチャク（Ma. Habcak < Kypchaq）の七大集団（Ma. aiman= 主要クラン）が存在し、各集団は 1~11 のオトグ（下位クラン）から構成されていた<sup>47</sup>。

### 3.3. 爵位

続いて爵位の問題へと移った<sup>48</sup>。アブライは、祖先伝来のカザフの習俗が、清への「帰順」で改められてしまうのではないかと不安を抱いており、衣服と帽子を改めること、爵位を受けることの二つを望んでいなかった。ヌサンは、清にそれを強制する方針はなく、エルケシャラがハルハの服を着用しているのが何よりの証だと述べた（報告 I: 1376-77）。

当初アブライは、清の爵位が一体どのようなものであるのか理解していなかったようである。爵位の意味をヌサンに尋ねると、両者の間で次のようなやり取りがなされた。

我々が「称号とは、我々の例規では、大功を立てた者に、大エジェンが褒め慈しみ恩恵を及すため賞与する。我々のハルハ四部にチェチェン汗がいる。チェチェンという爵号は、すなわち称号、これと同じである。また戦いで勇猛に尽力した者に恩恵を及ぼすため号を賞与し、称号にしたがって名を呼ぶ。」と述べた時、アブライは「称号に

表 中ジュズの集団構成

主要クラン (アイマン)	下位クラン (オトグ)	頭目名	戸数	備考
Taraktu (Taraqty)	Taraktu	Naimandai Batur	400	
Argan (Argyn)	Gadzagala Argan	Bugambai Batur	1,000	
	Kara Hasak	Hadzabek Bi	2,000	
	Altai Argan	Niyas Batur	3,000	
	Antagai Argan	Yabsak Batur	1,000	
	Karagûl argan	It Kara Batur	2,000	
	Başkatin argan	Janadzak Batur	2,000	
	Tobuk Tu Argan	Karpuk Bi	1,000	
	Hodzgan argan	Tulioke Bi	1,000	
	Turtul Argan	Babuki Bi	2,000	
	Argan Mailabalta	It Kara Batur	1,000	
	Baba Argan	Babanayar Bi	500	
Tulunggu (Telenggut)	Tulunggu	Janadzar Batur	1,000	*
Naiman (Nayman)	Teres Tamahala	Yaraleb Batur	1,000	
	Kara Kere Baijiget Naiman	Dolotbai Batur	10,000	
	Matai Naiman	Oljibai	10,000	
	Sardur Naiman	Mailai Batur	1,000	*
	Tultugur Naiman	Tanggadar Bi	1,000	
	Bolkci Naiman	Tas Batur	400	*
	Kukyar Naiman	Barak Batur	1,000	
	Bora Naiman	Yonosar Batur	2,000	
	Bahanala Naiman	Malar Batur	2,000	*
	Baltai Naiman	Etusi Batur	500	*
Kere (Kerey)	Acamaili Kere	Dursumbai Batur	10,000	*
	Acamaili Kere & Kur Sar	Madzarhelde Batur	2,000	*
	Abakta Kere	Hojibergen	1,000	
	Abakta	Niyasu Batur	500	*
	Iteili Kere	Janturu Batur	1,000	*
Wak (Waq)	Wak	Sar Bayan	1,000	
	Wak	Tilib Batur	1,000	*
	Wak	Barmak Batur	500	*
	Ikektu Wak	Esgul Batur	1,000	*
	Jangu Wak	Sar Batur	500	*
Habcak (Qypchaq)	Habcak	Hosokorbai Batur	3,000	
		合計	68,300	

註1) アスタリク (\*) は、シュンデネの調査で把握されていなかったオトグ・頭目であることを意味する。

はいくつ種類があるのか。」と尋ねた。我々は「汗、王、大臣に称号を賞与する場合、爵号をエジェンが賞与する。例えばアブライよ、汝にオルジト<sup>49</sup>=アブライという称号を賞与したならば、そのままオルジト=アブライと呼ぶことになる。また、汗、王、貝勒、貝子、公、これはみな銜である。〔外藩ではない〕大臣や官員の銜は、汝らとは異なる。……」と述べた<sup>50</sup>。

モンゴルの王侯層に対する外藩爵制を念頭に置き、ヌサンは、称号(号/colo)あるいは爵号(爵/hergen)と、汗や王などの等級(銜/jergi)の組み合わせからなる清の爵位について説明している。するとアブライは一転して爵位の授与に強い関心を持つようになり、清朝皇帝から「オルジト王」の爵位が授与されることを期待し、「汗」であればなおよいと述べた(報告I: 1377-79)。

以上の交渉を通じて、アブライは、清との関係構築が既存のカザフ社会に大きな変化をもたらすものでないと確信したに違いない。その認識に立った場合、清から授与される爵位も、アブライにとって新たな意味を持つようになった。カザフのハン家としては傍系のアブライは、ジュンガルの戦いの中で実力者の地位を獲得していったが、なおハンに推戴(正式な推戴は1771年)されていなかった。この状況において、清から授与される爵位、特に汗爵は、彼にとって「有益なるもの」と目に映った(報告I: 1378)。もちろん、カザフにおける伝統的なハン号と、清の汗爵は性格を異にしており、その点は乾隆帝もアブライ宛の勅諭で強調していたが、実際には清の爵位はカザフ社会において支配者の権

威を高める効果を持ち、カザフの汗爵所有者はハン号と汗爵を重ね合わせて把握するようになる(野田2011: 154-156)。清の進出を当初は警戒していたアブライであるが、言動の変化が如実に示すように、ヌサン使節との交渉を通じて、清との関係構築は自身の権威伸張を助ける利点として認識しなおされ、その認識は彼の子孫にも受け継がれていったといえよう。

### 3.4. 使節の帰還

頭目の名簿、爵位の授与に関する問題に片が付くと、前述したように、アブライはヌサンにアムルサナのロシア逃亡の噂を告げた。ヌサンはフラヒ=バートルのロシア派遣に同意するとともに、アムルサナがカザフ草原に舞い戻ってくる可能性を考慮し、大ジュズと小ジュズのハンにアムルサナ擒獲への協力を要請するトド文字書簡を作成し、アブライの印章を捺して送付した(報告I: 1379-80)。

しかし、長期滞在の使節の存在は、すでに交渉で一定の成果を得ていたアブライにとって次第に疎ましくなったようである。アブライは越冬に備えた移動と分散<sup>51</sup>の必要性を説明しながら、ヌサンになお残留する目的を尋ねた。ヌサンはカザフの地に滞在してアムルサナの動向を見極める気であったが、アブライは匪賊跋扈の危険性を説きながら帰還を促し、10月2日に清の軍営へ派遣するカザフの使臣9人に同行するよう求めた。ヌサンは一存で帰還を決定できないため、報告I・IIと頭目の名簿を持たせた者を先に軍営へ送った(報告I: 1383-85)。10月21日に届いた報告I・IIを目にしたジョーフイは、別のルートからアムルサナのロシア逃亡を聞き及んでおり<sup>52</sup>、ヌサン使節は帰還すべき

と判断した<sup>53</sup>。

帰還命令が届くまで、ヌサンとアブライは、清廷への入覲使節の派遣について協議した。やはり双方の思惑の違いはあったが、結局はアブライが提示した、名簿に記した中ジュズの諸頭目を2班に分け、各班をアブライの子弟を含むスルタン2名、バートルらを半分にした22名により構成させ、2度に分けて派遣する案が採用された<sup>54</sup>。実際にはこの決定どおりの使節派遣はなかったが、以後の清廷への入覲使節、あるいはイリヤタルバガタイに派遣された使節には、アブライやアブルフェイズら有爵者の子弟や同族のスルタンが加わる事が多く（Onuma 2010b）、上記の決定事項は一定の基準とみなされたようである。

1757年12月、ヌサン使節はアブライのもとを離れ帰路に着いた。そして1758年1月7日にエルケシャラが、1月10日にヌサンが軍営に帰着し<sup>55</sup>、往復の行程を含めて5ヶ月に及んだ使節の任務はここに終了した。

## おわりに

1757年、カザフからの使臣を迎え入れる一方で、清はヌサン使節をアブライのもとに派遣し、交渉にあたらせた。その第一の目的は、カザフ草原に潜伏していると考えられていたアムルサナの捕捉であり、交渉の前半はアムルサナ問題に時間が費やされた。ヌサン側が圧力をかけていく中、一時アブライは病に伏すが、回復後は積極的姿勢に転じた。おそらくこの変化は、アムルサナがロシアへ入ったという情報を入手したことによると推測される。後半の交渉内容は清-カザフ間の問題へと移ったが、清の姿勢は、ジューンガル善後策の失敗という反省の意

識もあり、極めて慎重であった。これに対して、清との関係が実効支配、あるいはカザフ社会の改変を意味しないことを理解したアブライは、カザフの頭目や集団構成の調査、爵位（汗爵）の授与、入覲使節の人員構成などの協議に積極的に臨み、清から多くの利益を引き出そうとした。

第一目標のアムルサナ問題の解決には至らなかったが、ヌサン使節の派遣と交渉を通じて、以後の清-カザフ関係を規定するいくつかの枠組みは定まった。何よりも、その後アブライが「ロシアとの関係が疎遠になるほど」（Valikhonov 1985: 114）清との結びつきを強めていったことは、ジューンガルの衰退・滅亡にともなう中央アジアの混乱を収束させ、西北領域の安定化を目指す清朝政権に大いに寄与したといえる。他方、アブライにとっても、ヌサン使節との交渉による清との関係樹立は、カザフ社会における自身の権威向上に直結したに違いない。例えば、アブライが正式にハンに推戴されるのは1771年であるが、1757年に清に対してハンを自称し、1758年頃には実際に周囲からハンと呼ばれるようになった（KRO: 582; 川上 1980: 44）。無論アブライの実力あってのことだろうが、想像をたくましくすれば、これには1757年後半のヌサン使節との交渉や乾隆帝からの勅書に、汗爵授与の話題が含まれていたことが影響しているのではないだろうか。

また、本稿が依拠したヌサン使節の二つの報告は、なお不明な点が多い18世紀中葉のカザフ遊牧社会に関する貴重な同時代史料である。本稿ではヌサン使節の活動を紹介することに主眼を置いたため、本格的な分析とまではいかなかったが、カザフ民族史・中央アジア史の文脈



において有益な情報を含んでいることは指摘できたと思う。今後、広く活用されることを期待したい。

## 註

- 1 ズラートキンによれば、アムルサナは1755-56年の冬にボルトラ・イリ地方に滞在し、オイラトとカザフの諸首長の同調者を集め、オイラトのハンに推戴されたという (Zlatkin 1963: 449)。ただし、ズラートキンが依拠するロシア史料には、アムルサナが「ジュンガルの地でダワチに代わり支配者となった」とあるのみで、ハンに推戴されたとは記されていない。
- 2 清朝史料では、台吉と侍衛という立場の差をふまえ、ヌサンよりエルケシャラの名前を前に記している。しかし、実際の行動においては、ヌサンが主導的な立場をとっており、ヌサン使節と表記するのが適切と判断した。
- 3 「満文録副」1671.15, 47: 1338-1388, 乾隆22年9月14日 [1757/10/26], ジョーフイの奏摺 (『新疆匯編』25: 379-406)。報告Iに該当するのは1339-1385コマの部分である。なお、筆者は未見であるが、報告Iの内容は「軍機処満文月摺檔」(奏摺の複写を月毎に綴じた冊子)にも収録されており、野田 (2011: 124, 128) が利用している。
- 4 「満文録副」1655.40, 46: 1551-1559, 乾隆22年9月14日 [1757/10/26], ジョーフイの奏摺 (『新疆匯編』25: 368-372)。報告IIに該当するのは1552-1558コマの部分である。
- 5 「準略」正編巻44: 33b-36a, 乾隆22年10月丙寅 (7日) [1757/11/18] 条。
- 6 「八旗通志」巻155, 大臣伝21, 努三条。
- 7 「王公表伝」巻70, 附貝子品級輔國公額爾克沙喇列伝。
- 8 「満文録副」1653.19, 46: 883, 乾隆22年8月27日 [1757/10/9], ジョーフイの奏摺 (『新疆匯編』25: 186)。Erkešara, jun gar de aniya goidaha. Hasak i banin be umesi sambime, abulai i emgi emu bade juwe ilan aniya tefi, sain i guculehe.
- 9 「準略」正編巻41: 21b-22b, 乾隆22年7月丙午 (16日) [1757/8/30] 条。交易関係の模索や、カザフのオイラト旧遊牧地への侵入阻止も視野に入っていたが、実際の交渉では積極的に取り上げられていない。
- 10 清はカザフの各ジュズを構成する下位集団をオトグと呼び、当初はその統率者をザイサンと呼んでいた。これは、ジュンガル部を構成したオトグの概念をもって、清がカザフ遊牧集団の体系を便宜的に把握していたこと意味する。
- 11 「満文録副」1643.12, 45: 2712, 乾隆22年6月18日 [1757/8/2], ジョーフイの奏摺 (『新疆匯編』23: 381-382)。Suwe isinaha manggi abulai ginggun ijishün i dahame dosika be saišame damu amursana be jafara be kicekini. Unenggi amursana be jafame bahafi amba ejen de beneci, amba ejen sini unenggi gūnin be bulekušefi urunakū ujen amba kesi isibumbi seme hūsutuleme gisure. Geren otok i dalaha urse be baicame icihiyara de musei baita icihiyara gese narhūšame kimcime baicara be baiburakū. Damu ceni banin de acabume ce cihanggai fungnehen be alime gaiki sere niyalma be ejefi amba ajige be ilgafi gajici wajiha.
- 12 ホジベルゲンは、8月23日にジョーフイの軍営に到着し、アブライの帰順の意向とアムルサナ擒獲への協力を伝えている。「正編」正編巻42: 17b-21a, 乾隆22年8月丙寅 (7日) [1757/9/19] 条。
- 13 報告I: 1341。Mini beye dergi ujan de tehe geren nukete urse be kadalara dalaha niyalma. Yaya bai elcin jici, gemu meni baci icihiyafi abulai de acabumbi.
- 14 カザフ関連の清の満洲語史料には、jangkisi なる単語がしばしば登場し、一定の社会的地位を有する人物を指す呼称として読める。おそらく現在のカザフ社会や新疆ウイグル社会にも存在し、呪術能力をもって祈祷、招魂、占術などをおこなうジンケシ (jinkesh) に比定されるのではないかと考える。
- 15 報告II: 1554。Manju cooha duin oirat be wacihiyaha. Membe ainahai ergumbure. Honin adarama niohe emgi bici ombi.
- 16 本来オイボーはソロンの参領の地位にあったが、「領催を委ねた参領」(Ma. Fund bošokū be araha jalan i janggin) となっていた。このように特定の軍務に従事するにあたり、暫時任命された官職を「委官/araha hafan」という。
- 17 報告II: 1552。Abulai dehi se funcembi. Beye ajigen, šufangga salu, niyalma getuken, giyan be baime gisurembi.
- 18 報告I: 1350-51。Amba ejen i urgan labdu. Duibuleci waliyabuha morin be baire gese. Niyalma labdu oci bahambi. Amba ejen i urgan golmin. Aibide genembi, urunakū bahambi dere.
- 19 「満文録副」1668.14, 47: 777-781, 乾隆22年6月29日 [1757/8/13], ジョーフイの奏摺 (『新疆匯編』24: 72-74)。
- 20 報告I: 1358。Bi Amursana i emgi fucihi be uju de hukšefi, miyoocan be angga de ašufi gashūha bihe. Amursana mini baru nadan mudan hashūn be efulehe. Te bi imbe jafari, amba ejen i kesi šang be gaiki seme abka de jalbarime baimbi. Abka minde kesi isibufi, amursana mini gala de nambureo...

- 21 報告Ⅱ：1552。Membe acara de sucungga juwe inenggi gūnin be fuhali gisurehekū. Tuwaci, meni gisun arbun be cendeme bihe. Taiji erkešara i baru fe banjiha bebe jonome gisurere be tuwaci, keb sembi. Abulai nimefi yebe oho manngi, inenggidari acafi baita gisurere de, abulai arubun meni baru hebešeme icihiyame deribuhe.
- 22 ここでの「大国」(Ma. amba gurun) は、擡頭されているので清を指す。
- 23 報告Ⅰ：1382。Meni hasak amba gurun de duibuleci, ajige. Ajige de dulibuleci, ambakan. Te amursana aika oros de dosikangge yargiyān oci, amursana be gairengge amba ejen de bi. Meni hasak, oros i baru hū waliyame acafi, hūdašame yabumbi. Meni hūsun oci, amursana be gaimē muterakū. Duibuleci, yehere tetun be jafafi wehe de fahara gese.
- 24 9月26日にヌサンらは、使節への情報提供者となっていたアブライ配下のオイラト人アルシャン(カザフでの名はバヤン=ケシク)から、アムルサナがロシアに捕らえられたという知らせを入手した(報告Ⅱ：1555)。
- 25 ジューンガルと戦いを続ける一方で、カザフはロシアに保護を求め、1730年には小ジュズのアブルハイル=ハンが、カザフのハンとしては最初にロシアに臣籍(Ru. poddanstvo)を宣誓した。アブライも1740年に中ジュズのアブルマンベト=ハンとオレンブルグに出向き、臣籍を宣誓している。ただし、この時点でのカザフの臣籍の宣誓は、形式的かつ部分的であり、ロシアへの「服属」を意味するものではなかった(野田2011：49-50)。
- 26 ただし、この論争において双方が言及する「カザフ」というものが、清の場合は東部の中ジュズ、ロシアの場合は西部の小ジュズを主な対象としており、互いにその代表者との関係をもって、カザフ全体との帰属を主張する嫌いがあった(野田2011：112-113)。
- 27 ダ(タ)ルハ(カ)ン d(t)arkh(q)an は、古くから中央ユーラシアのテュルク系・モンゴル系諸族の間で使用された称号である。モンゴル時代においては、免税の特権や九つまで罪を犯しても罰せられないという特権があったが(恵谷1963；韓1982：18-50)、その後の時代は概して名目上の尊号である場合が多く、地域・集団ごとに意味は一定していない。ロシアのタルハン制に関しては、宇山智彦氏からご教示を賜った。特に記して謝意を表したい。
- 28 「満文上諭檔」軍務19(1)、乾隆22年7月16日[1757/8/30] 条。Ceni ba umesi goro. Ede cende fungnehen jergi bahabure babe hono icihiyara be baiburakū. Jao hūi, fude se emgeri niyalma takūrafi abulai i jakade unggifi cende fungnehen jergi bahabure jalin ulhibure be dahame, ceni cihai okini. Ume hacihiyara. Ce aika cihanggai fungnehen gajiki seci inu ombi. Ce aika cihakū oci, uthai jai ume jonoro. Ceni chihangga be tuwame yabubuci wajiha.
- 29 「乾隆朝上諭檔」3：77；「準略」正編卷41：26a-b、乾隆22年7月丁未(17日)[1757/8/31] 条。
- 30 本稿では中央ユーラシアのモンゴル系・テュルク系諸勢力の支配者(特にチンギス裔)が自称したハン(Mo. qaγan, Tu. khān) 号を「ハン」と記し、清朝皇帝が臣下の外藩モンゴル王公やそれに準ずる存在(カザフ首長層など)に授与した爵位としてのそれを「汗」(Ma. han) と記す。
- 31 「満文録副」1669.4. 47：832-834。乾隆22年7月17日[1757/8/31] (『新疆匯編』24：315-316)；「満文上諭檔」軍務19(1)、乾隆22年7月17日[1757/8/31] 条。Cf. 「準略」正編卷41：24a-b。Meni jianggiyūn sei baci, suwembe amba ejen de dahaha manggi, suwembe urunakū han, wang ni colo šangnambi. suweni nuktei ton be baicafi alibukini seme afabuhangge cohome jiyanggiyūn ambasa baita icihiyara niyalma kai. Argū dorgi ba i kooli be memereme icihiyangge, suweni jecen i ergide tehe urese de acarakū. Suwe goro jecen de tehe niyalma dorgi jasak, kalka, ūlet i jergi urse de duibuleci ojarahū. Suwembe nuktei urse be baicabuci, jugūn goro de suwe amasi Julesi baibi suilara be alimbi. Tusa akū uttu ofi, suwe an i suweni fe doro baime bikini. Te bicibe abulai sai te uthai han kai. Bi kesi isibume fungnecibe inu han fungnere dabala. Ereci jai ambakan hergen akū. Damu sini han serengge, bi suweni cisui tukiyehegge, umai meni fungnehe colo hergen waka. Sini gūnin de aika mini kesi isibume fungneci ele derengge ombi seme gūnici, bi uthai kesi isibume, sinde colo šangname han i fungnehen bahabuci inu ombi. Suweni fejergi urse oci an i fe songkoi yabukini. Suweci alban gaire ba akū, inu suweci tucibubure jaka hacin akū.
- 32 ただし、アブライが正式に中ジュズのハンに推戴されるのは1771年のことである。
- 33 この勅書は10月中旬にジョーフィの軍営に到着し、そこからアブライに届けられた。「満文録副」1671.9. 47：1271-1274。乾隆22年9月9日[1757/10/21]、ジョーフィ等の奏摺(『新疆匯編』25：318-320)。
- 34 註8、同史料、「満文録副」46：880-881。ジョーフ等の奏摺に引用された乾隆22年7月26日[1757/9/10]の上諭(『新疆匯編』25：184-185)。Mini gūnin de majige eleburakūngge ce onggolo nusan sebe takūraha bade, hasak i abulai i fejergi ursei ton be baicara, hafan hergen šangnara sere hacin be, bi labdu gūninjambi. Adaramē seci, muse ere gisun be cende

- gisurehe manggi, ce gelembike, hülha amursana geli ere gisun jafafi balai banjibume gisurefi ceni hasak i urse be holtoro be boljoci ojurakū seme gunifi, ere jergi babe gemu baiburakū seme amcame hesi bithe wasimbume unggihe bicibe, jao hūi, fude ere hese be alime gaiha manggi, kemuni hūdun hacihiyame amcame niyalma takūrafi, hasak i abulai de unggī.
- 35 同上。「満文録副」46: 881-882 (『新疆匯編』25: 185)。
- 36 同上。「満文録副」46: 882-883、ジョーフイ等の奏摺 (『新疆匯編』25: 185-186)。Suwe isinaha manggi, uju coho de umesi oyonggo ningge, amursana be baime jafara baita. Damu abulai be hacihiyame amursana be hūdun jafafi benjici, gūwa babe yaya demun i icihiyaci ombi. Icihiyarakū oci inu ombi. Ce aika fungnehen baici, ce bithe arafi beye jidere, eici juse deote takūrafi baime wesimbukini. Ce cihangga akū oci, ume hacihiyara. Jai abulai gese dalaha otok i urse be baicara de, umesi musei baita icihiyara adali, boigon i ton be ejere akūmbume kimcire be baiburakū sere anggala, jun gar i otok be icihiyara gese baivvara be inu baitarakū. Damu abulai de fonjifi, ya niyalma ai otok de dalahabi, udu boigon i niyalma kadalaha babe fonjifi, muse saci wajiha.
- 37 「準略」正編卷44: 28a-b. 乾隆22年10月甲子(5日) [1757/11/16] 条。
- 38 「準略」正編卷42: 1b-2b. 乾隆22年7月丙辰(26日) [1757/9/9] 条。
- 39 報告I: 1368-69. Meni hasak cihetei adali son son i nukteme, morin ulha be fusembume yabuhai jihe. Meni ilan aiman ortoju, ulujus, kešijus be gemu emu adali. Ulujus tasigan i bade tehebi. Kešijus sir bira dube jai bira bade tehebi. gemu emu beye, dain oci inu sasa, dahaci inu sasa. Abulai mini gisun ci jurcerakū. Mini gūnin de, ulujus, kešijus i han, solton sei gebu be gemu ortoju meni gebu sasa arafi bureci tulgiyen, ... Aika esei dalaha niyalma gebu be ararakū oci, ese korskombime gūnin fakcašūn ombi. Adarame icihiyara babe ambasai emgi hebešeki.
- 40 「満文録副」1677.1, 47: 2242-2243, 乾隆22年12月18日 [1758/1/27], シュンデネの奏摺 (『新疆匯編』27: 177-178)。
- 41 報告I: 1373. Ne ambasa meni gebu be gairengge, eici jiyanggiyūn i gisun, ejen i hese. Meni gūnin de sekiyen akū gese.
- 42 チンギス裔「白骨」(ハン、スルタン)に属さない、いわゆる「黒骨」出身のカザフ首長層は、バートルまたはビと呼ばれた。
- 43 アブライはトド文字を用いたと推測される。これとは別にヌサンに手渡したカザフの入観使者の名冊を、アブライはトド文字で記している。「満文録副」1672.14, 47: 1537, 乾隆22年10月16日 [1757/11/27], フデの奏摺 (『新疆匯編』26: 246)。
- 44 註40, 同史料, 「満文録副」47: 2242-2243 (『新疆匯編』27: 177-178)。
- 45 「満文録副」1679.6, 47: 2595-2298, 乾隆23年正月 [1758/2/8-3/8] (『新疆匯編』28: 78-79)。
- 46 中ジュズにおけるテレングトと呼ばれる集団はハンの直隸民を指し, 18世紀初頭のタウケ=ハンの時代に成立したとされる(野田2011: 122)。
- 47 カザフの各ジュズは複数のルウ ru と呼ばれる父系クラン集団から構成され, さらに主要クランは複数の下位クランを持つ(藤本2011: 50-52)。カザフのルウと清が認識するオトグは完全に一致する概念ではないが(野田2011: 3), この名冊では, 最上位レベルのルウに aiman を, 下位レベルのルウに otok の語をあてている。
- 48 清朝皇帝がカザフのスルタンに授与した爵位とその意義については, 野田が制度の変遷も含めて詳しく考察している(Noda 2010; 野田2011: 149-179)。ここでの議論はヌサン使節の交渉内容に限定するが, 野田の考察と一部重複することを述べておく。
- 49 満洲語の綴りは oljitu となっているが, モンゴル語 oljeitü (幸福なる)の音写であろう。
- 50 報告I: 1377-1378. Meni gisun, colo serengge, meni kooli de umesi gung ilibuha niyalma amba ejen saišame jilame kesi isibume colo šangnambi. Meni kalkai duin aiman de cecen han bi. Cecen sere hergen uthai colo ere adali. Jai dain de baturulame faššamha urse de kesi isibume colo šangnafi, colo be dahame gebu be gebulembi sehede, abulai fonjirengge, colo de udu hacin bi. Meni gisurengge, han, wang, ambasa de colo šangnara de hergen be ejen šangnambi. duibuleci abulai simbe oljitu abulai seme colo šangnaci, uthai oljitu abulai seme hūlambi. Jai han, wang, beile, beise, gung ere gemu jergi. Ambasa hafasa i jergi suweci encu...
- 51 中央ユーラシアの遊牧民は, 降雪を迎える時期に小集団に分散して風雪をしのげる溪谷などで越冬し, 家畜の出産期である春に再び結集を開始して, 夏秋に広い草原に大きく展開する年周期の遊牧パターンを持つ。アブライもヌサンに「我々のカザフは降雪の後, それぞれ牧群を追い立てバラバラに遊牧しに行き, 緑草が芽吹いた後, また一カ所に集まる」(報告I: 1383)と述べている。なおアブライは, 頭目の名簿の提出後, 越冬のためにバヤナウルに向かって移動を開始した(報告II: 1156)。
- 52 ただし, この時に清側が得ていたアムルサナがイルティシュ河で溺死したという情報は, ロシアが時間を稼ぐために流したものであった。

- 53 註3. 同史料,「満文録副」47: 1386. ジョーフィの奏摺(『新疆匯編』25: 405)。
- 54 註43. 同史料,「満文録副」47: 1534-1537(『新疆匯編』26: 246-248)。
- 55 「満文録副」1677.15. 47: 2232-2233. 乾隆22年12月18日[1758/12/18]. シュンデネの奏摺(『新疆匯編』27: 201-202)。両者の軍営到着日が異なる理由は不明である。

## 文献一覽

### 1. 未公刊史料

「満文録副」:「軍機処満文録副奏摺」中国第一歴史檔案館所蔵(マイクロフィルム)。

「満文上諭檔」:「軍機処満文上諭檔」中国第一歴史檔案館所蔵。

### 2. 公刊史料

「八旗通志」: 福隆安等奉敕纂輯『欽定八旗通志』巻首14巻+342巻, 嘉慶4年[1799]→[清]福隆安等修, 李洵・趙德貴・周毓方・薛虹主校点『欽定八旗通志』11冊, 長春: 吉林文史出版社, 2002年。

KRO: *Казахско-русские отношения в XVI-XVIII веках: сборник документов и материалов*, Алма-Ата: Издательство Академии Наук Казахской ССР, 1961.

MOTsA: *Международные отношения в Центральной Азии, XVII-XVIII вв.*, к. 1-2, Москва: “Наука” главная редакция восточной литературы, 1989.

「乾隆朝上諭檔」: 中国第一歴史檔案館編『乾隆朝上諭檔』18冊, 北京: 檔案出版社, 1991年。

「王公表伝」: 祁韻士等奉勅纂輯『欽定外藩蒙古回部王公表伝』120巻, 乾隆44年[1779]→[景印文淵閣四庫全書](台北: 台湾商務印書館, 1983-86年), 第454冊。

「新疆匯編」: 中国辺疆史地研究中心・中国第一歴史檔案館合編『清代新疆滿文檔案匯編』283冊, 桂林: 广西師範大学出版社, 2012年。

「準略」: 傅恒等奉勅纂輯『平定準噶爾方略』前編54巻, 正編85巻, 続編32巻, 乾隆37年[1772]→4冊, 北京: 全国図書館文献縮微複製中心, 1990年。

### 3. 参考文献

Chang 2007: Michael Chang, *A Court on Horseback: Imperial Touring & the Construction of Qing Rule, 1680-1785*, Cambridge (Massachusetts) and London: Harvard University Asia Center, 2007.

恵谷 1963: 恵谷俊之「荅荊罕考」『東洋史研究』22(2): 61-78, 1963年。

藤本 2011: 藤本透子『よみがえる使者儀礼—現代カザフのイスラーム復興』東京: 風響社, 2011年。

Gurevich 1979: Б. П. Гуревич, *Международные отношения в Центральной Азии XIV-первой половине XIX в.*, Москва: Издательство «Наука» Главная редакция восточной литературы, 1979.

韓 1982: 韓儒林『穹廡集—元史及西北民族史研究』上海: 上海人民出版社, 1982年。

川上 1980: 川上晴「アブライの勢力拡大—十八世紀カザフスタンに関する一考察」『待兼山論叢』14: 27-49, 1980年。

森川 1983: 森川哲雄「アムルサナをめぐる露清交渉始末」『歴史学・地理学年報』7: 75-105, 1983年。

野田 2005: 野田仁「露清の狭間のカザフ・ハーン国—スルタンと清朝の関係を中心に」『東洋学報』87(2): 29-59, 2005年。

野田 2011: 野田仁『露清帝国とカザフ=ハーン国』東京: 東京大学出版会, 2011年。

Noda 2010: Noda Jin, “An Essay on the Title of Kazakh Sultans in the Qing Archival Document,” in Noda & Onuma 2010: 126-151.

Noda & Onuma 2010: Noda Jin and Onuma Takahiro, *A Collection of Documents from the Kazakh Sultans to the Qing Dynasty (Central Eurasian Research Series, Special Issue 1)*, Tokyo: The University of Tokyo, 2010.

小沼 2003: 小沼孝博「清朝のジュン=ガル征服と二重の支配構想」『史学研究』240: 58-79, 2003年。

小沼 2004: 小沼孝博「清朝によるオーロト各オトク支配の展開—モンゴル諸部に対する「旗」支配の導入」『東洋学報』85(4): 1-26, 2004年。

小沼 2006: 小沼孝博「清朝とカザフ遊牧勢力との政治的関係に関する一考察—中央アジアにおける「エージェン=アルバト」関係の敷衍と展開」『アジア・アフリカ言語文化研究』72: 39-63, 2006年。

小沼 2014: 小沼孝博『清と中央アジア草原』東京: 東京大学出版会, 2014年(近刊予定)。

Onuma 2010a: Onuma Takahiro, “Political Relations between the Qing Dynasty and Kazakh Nomads in the Mid-18<sup>th</sup> Century: Promotion of the ‘*ejen-albatu*’ relationship’ in Central Asia,” in Noda & Onuma 2010: 86-125.

Onuma 2010b: Onuma Takahiro, “Kazakh Missions to the Qing Court,” in Noda & Onuma 2010: 151-159.

スルタンガリエヴァ 2008: グルミラ・スルタンガリエヴァ(宇山智彦訳)「南ウラルと西カザフスタンのテュルク系諸民族に対するロシア帝国の政策の同時性(一八一—九世紀前半)」『ロシア史研究』82: 61-77, 2008年。

Valikhanov 1985: Ч. Ч. Валиханов, *Собрание сочинений: в пяти томах*, т. 4, Алма-Ата: Главная редакция Казахской советской энциклопедии, 1985.

Zlatkin 1963: И. Я. Златкин, *История Джунгарского ханства (1635-1758)*, Москва: Академия наук СССР, 1963.

【補註】この点に関しては、近刊予定の小沼  
(2014) の第 4 章を参照されたい。

究費（若手研究 B）による研究成果の一部であ  
る。

【附記】本稿は平成 25 年度文部科学省科学研

## Dispatch of the Nusan Mission : The Negotiations between Qing and Ablay in 1757

Onuma Takahiro

In 1757, the Qing dynasty dispatched the Nusan mission to negotiate directly with Ablay Sultan, a leader of the Kazakh Middle Zhuz, who wished to pledge “allegiance” to the Qing. The first target of the mission was to capture Amursana, an Oyrat leader, who rebelled against the Qing and hid in the Kazakh steppe. The first stage of the negotiations with Ablay was spent on this problem, and the pressure from Nusan caused Ablay to fall ill for a while. However, after recuperating, Ablay took a positive stance. This change was probably because he had obtained information that Amursana had entered Russia. In the latter half of the negotiations, they discussed problems related to development of the Qing-Kazakh relationship. The Qing’s recent failure to rule the Oyrats ensured that their attitude during the negotiations was very passive. In contrast, Ablay, who recognized that the relationship with the Qing dynasty did not involve any effective control and reorganization of Kazakh society, was very active in negotiations on the submission of a list of Kazakh leaders and groups, the bestowal of titles, and so on, through which he tried to derive a lot of profit from the Qing.

Although the problem of Amursana was not resolved, the basic framework of the Qing-Kazakh relationship was established through the dispatch of the Nusan Mission. Consequently, Ablay so strengthened his ties with the Qing that he “became estranged from Russia.” The mission contributed to the Qing’s efforts to bring an end to the confusion in Central Asia after the collapse of the Junghar regime and to establish a new order in the western territory.

In addition, the two reports drafted by the Nusan mission are valuable contemporary sources on the Kazakh situations in the middle eighteenth century. It includes interesting information about Ablay, his followers, and Kazakh society. The figures of Kazakh people that appear in these reports provide a local perspective on Kazakh society at that time, which had been hitherto etched only by Russian documents.